

ローマ人への手紙第一四回質問

- 4 働く者の場合に、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。
 - 5 何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。
 - 6 ダビデもまた、行いとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。
 - 7 「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。」
 - 8 主が罪を認めない人は幸いである。」
(ロマ四章四―八節／新改訳2017)
- (問一) ダビデはどのようにして、義と認められ、正しい者とされましたか。



不敬虔な者を義とされる神

(ロマ四章四―八節)

善行をすることによって罪から救われるという思想は、実に一般的ですが、聖書は一貫してこのような思想を否定します。というのは、人間が持っている罪というものは、人間の善行などによって消えてしまうようなしろものではなく、死に値するものだからです。ですから、人間が自分の罪を償おうとすれば、死ぬ以外にはありません。自分が生きたまま、善行をしたことぐらいで、償われるものではないのです。それでは、わたしたちが罪から救われるということは、絶望なのでしょうか。そうではありません。神がわたしたちの罪を償うために、御子イエス・キリストを身代わりとして十字架の上に死なせ、わたしたちの罪の贖いをなしてくださいました。そして、これを信じ受け入れる者を、救ってくださるのです。これが、救いの福音です。

ですから、聖書が教えている救いの福音は、わたしたちの善行に対する報酬ではなく、ただ神の恵みによるものです。「いったい、働く者の場合、その報酬は恵みではなく、当然、支払うべきものとみなされる。しかし、働きのない者が、不敬虔な者を義とするお方を信じる場合、その人の信仰が義と認められるのである。」すでに繰り返し申してきましたように、神が不敬虔なわたしたちを義と認めてくださるのには、そこに確かな裏づけがあるのです。キリストがわたし

たちの罪の支払うべき値である死を引き受けてくださったという事です。この確かな裏づけによって、神は不正をなされたのではないことが明らかです。

それでは、神は不敬虔な者を、どのようにして義と認めてくださいるのでしょうか。それは、キリストが十字架で成し遂げてくださった義の着物をわたしたちが信仰によって着る時、そのキリストの義を、わたしたちの義と認めてくださいるのです。わたしたちがキリストを信仰によって受け入れるというのは、キリストの義の着物を着るということであり、神はそのキリストの義を、わたしたちの義と認めてくださいるのです。

信仰義認には、三つの事柄があります。第一は、キリストの功績の転嫁です。キリストが十字架上で、律法の要求どおり、罪の償いをしてくださったことを、信じる者たちのものとみなしてくださいるということです。第二は、刑罰の免除です。キリストが十字架上で、わたしたちの身代わりにわたしたちの罪の刑罰を受けてくださったので、わたしたちは、もはやその罪の刑罰を受けなくてもよくなったということです。第三は、罪のために失われてしまった神の祝福の回復です。神を神として崇めもせず、神を神として認めない不敬虔なわたしたちのために、神はこれだけのことをしてくださいるのです。この救いが恵みでなくてなんでしょうか。

パウロは、旧約時代のふたりの代表をここに挙げて、信仰義認の裏づけとしています。ひとりには、ユダヤ人の民族的先祖であるアブラハムでしたが、もうひとりには、その子孫から救い主が出るという顕著な約束を与えられているダビデ王で

す。このふたりは、マタイによる福音書においても、イエス・キリストに至る系図の冒頭に出て来ます。「アブラハムの子であり、ダビデの子であるイエス・キリストの系図⁽¹⁾」として出て来ます。そういう意味で、このふたりは旧約時代の代表的な人物であると言いうことができましょう。そして、アブラハムが信仰によつて義と認められたという例証として挙げられました。今度は、行ないによるのではなく、信仰によつて義と認められることの例証として、ダビデを、その詩篇三二篇とともに引照しています。

「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。」

主が罪を認められない人は、幸いである。」
おそらくこの詩篇は、五一篇の詩篇と同じような状況の下で作られたものであろうと思われます。彼には、深い罪の意識がありました。その時のことについて、彼はこう歌っています。

「私が自分の罪を言い表わさなかつた時は、一日中うめいたので、身も心も疲れ果てました。あなたの御手がいつも心に重くのしかかり、私の力はなくなつてしまつたからです。」

ダビデは、罪を隠し持つてゐることの苦悩を述べております。ダビデは、あくまでもその苦悩を罪のための自責の念としてではなく、神のさばきの御手のためであると告白しています。そして、そのことを知つたダビデは、神の御前に隠すことのできるものなど一つもないことを知り、その罪を告白して

ます。

「その時、私は自分の罪をあなたに申し上げ、隠すことをやめました。『私の罪を主に告白しよう』と決心した時、⁽³⁾あなたは私の罪を赦してくださいました。」

こうして、ダビデは善行を積んだり、自分で何か償いをする事によって罪が赦されたのではなく、神の御前に自分の罪を認め、告白した時、その罪を神が赦し、義と認めてくださったのです。ここでも、パウロが言っていることは、ダビデが自分の罪を認めたり、告白したという彼のわざによって罪が赦されたのではなく、信仰によって、神が赦してくださいましたということです。その背後には、言うまでもなくキリストの贖いという裏づけがあったのです。

パウロがここで、ダビデ王を引き合いに出してきているのには、理由がないわけではありません。人間はいつでも自分を正当化しようとし、自己義認に窮々となつていているからです。泥棒にも三分の理ということわざがあるように、どんな人でも自分のやったことに対して、それを正当化しようとするものです。ほかの人と比較して、その人たちほど悪くないと言つてみたり、償いさえすればそれですべての罪悪は帳消しにされると考えたりします。ダビデ王が罪を犯したとき、彼に面と向かつて諫言する者はおりませんでした。王の権威をもつて退けられるのがおちでしょうし、悪くすればたちどころに殺されないとも限らないからです。ですから、多くの人々は、見て見ぬふりをしました。そうでなければ、人妻と姦淫の罪を犯したあと殺人の罪を犯すまで、すべてが順調に運ぶ

はずはありませんでした。しかし、そこへ神の人ナタンが現われて、罪に深く染まっていたダビデ王に一つの譬話を語ります。罪のため、自己を正当化しようという思いを持ったダビデ王は、その話を聞くと、その非情な男は死刑に当たると宣言しました。それは、自分の罪をおおい隠す意図からです。しかし、神の人ナタンも黙ってはいませんでした。「あなたこそ、その人です」と叫びました。神によって勇気づけられたナタンは、王の権威も恐れず、神のことは語ったのです。おそらく彼は死を覚悟していたのでしょう。しかし、神はこのナタンのことばを用いられ、ダビデ王の心に鋭い刃物のようにそれを突き刺されました。ダビデ王は、その時、御霊の声を打ち消すことができず、ただちに「わたしは罪を犯しました」と告白したのです。このことは、サムエル記二、一——二章にくわしくしるされています。

神が求めておられるのは、神の御前に自分の罪をすなおに認め、神のあわれみにすがることです。神はわたしたちを罪から救うために、驚くべき犠牲を払い、御子イエス・キリストによる贖いを成し遂げてくださいました。

わたしたちを罪から救ってくださいるために、人間では到底できないことを、してくださったのです。神のみこころは、不敬虔な者を、キリストの贖いの血によってきよめ、また義と認めてくださることなのです。ですから、わたしたちはそのことを知り、神のあわれみにすがり、恵みによる救いに入っていたたく以外にはありません。すでに救っていただけだいた者たちは、その救いの恵みが、いかに大きく、偉大なものであるかということ覚えて、神をあがめる以外にはないはず

注(1) マタイによる福音書一章一節。

(2) 詩篇三二篇三一—四節 現代訳。

(3) 同書三二篇五節 現代訳。